

朝日新聞「私の視点」原稿

山梨大学工学部の早期退学勧告制度

山梨大学教授・工学部長 伊藤 洋

大学生の学力問題が世間の耳目を集めている。山梨大学工学部では、来年度前期終了時から、最低基準の学業成績を修められず、過去の統計からみてそのままでは卒業が不可能であろうと判断された学生で、修学指導を行った上でもなお改善が見込まれないと専門委員会が判断した場合には退学を勧告することとしている。この秋の前期終了時に全学生の成績を集計してみたところ、現時点で5%にも及ぶ成績不振者がいることが判明した。そこで、強制はしないものの、この制度に準ずる通告をこのたび本人と連帯保証人に対して行った。

一般に近年の学力不審者については、自我の形成がいたって弱く幼児性が目立ち、自己管理能力が乏しく、人生の夢を構想する力も弱く、職業意識が極めて希薄である、という特徴を列挙することができる。その結果、大学でどのように自分を練磨していけばよいのか分からず、本来楽しいはずの学習が苦痛になって学力不振に陥っているケースが殆どである。

そこで、この制度で退学を余儀なくされた者には、一年以上の社会経験を積み、学ぶことの大切さと楽しさを理解できるようになったら、原則として無条件に再入学を認めることとしている。

標準年齢の学生と社会人学生が一堂に会して開講される公開講座などでは、社会人受講生の学習意欲は着座する位置と目付きと質問の質・量で、圧倒的に標準学生のそれを凌駕している。しかし、その社会人学生が大学生年齢の時分にそれ程の学習意欲を持っていたかといえば必ずしもそうではなかったかもしれない。つまり、学びには個人個人の「旬」があって、その意欲の最も盛んなときに高等教育を受ければよい。それを、無目的にひとしなみの脅迫に促されて大衆化した大学に進学する風潮こそが学力不審者を大量に作り出す最大の要因ではないか。

山梨大学工学部の退学勧告制度は、単に学力不振者を冷たくキャンパスから追い出そうというのではない。学生に学力が不振だと決め付けるためには、当然のこととして教師の教育力が問われる。面白くもない講義を受けさせられれば誰でも学習意欲が減退する。天に向かって唾を吐くように、この制度は教員たちにツケが回ってくる。筆者は、それこそが本制度導入の主産物と考えている。

本制度導入の裏には、ほかにも重要な要因がある。その一つは、これからの理工学系大学には世界標準に準拠した教育の質、卒業生の質が求められている。我が国ではJABEE（日本技術者教育認定機構）が、大学など高等教育機関で実施されている技術者教育プログラムを審査し、

それが社会の要求水準を満たしているかどうかを評価し、要求水準を満たしている教育プログラムを認定する専門教育認定制度がいま整備されようとしている。二〇〇三年実施を前にして、大学の生き残りをかけた待ったなしの技術者教育改革が求められている。

また、技術者教育としては、近年の急激な技術革新の中で、本格的な社会人現職教育が求められてもいる。我が国の大学は、その制度の創設以来一貫して学歴賦与機関として人々に認識されてきた。二十二歳で手にした学歴がその人の人生を支配するがごとき虚偽と少数の事実とが交錯してきたのである。しかし、もはやそのような時代ではない。

過去に退学勧告された経験のある者もそうでない者もひっくるめて社会人現職再教育が、人生の折々で受けられる生涯高等教育システムとして構築されなくてはならない。そこでは「卒業」という言葉が「死語」になる。本制度の導入はそこまでを視野に入れて構想されたものである。